香山壽夫先生インタビュー

―建築の持つ公共性の意義とコスト管理の大切さ―＜後編＞

有限会社香山壽夫建築研究所　所長　香山　壽夫

建築教育のあり方

――― 引き続き香山先生にお話をお伺いいたします。公共的な建築には文化的な価値を付加する要素も大きいですから、千年前からずっと残っているような建築が生み出されてきました。これからは、既存建築物に対しても、様々に手をかけて、時間をかけて手づくりをしていくことが大切になるのでしょうか。

香山　そのとおりだとは思います。壊して建て直すではなく、手を入れて残していくということは、本当に心を入れてそれを積み上げていくということで、それだから、千年経ってもいい建物として残るということでしょう。ですから、単に、テナントが変わったので建て直した建物と、既存の建物を直しながら良くなっていったものとは、同じ建物でも人の心に働きかける力が全然違うんですよ。しかしそれを口や精神論だけで言っていては済まないわけで、その二つの違いを、具体的なシステムや方法として根付くように考えていかなければならない。大学の中でそのような問題意識を持っている人間が、実際の問題としてその辺を理論としても、教育としても整えていかなければならないと思っています。簡単なことではないけれども。

――― 確かに具体的な方法論が必要ですね。建築学科で学んだ人間にとっては、それが責務であり、仕事になるのですね。

香山　そう思います。大学で設計論を教える立場にあって、かつ実際に設計活動をしている人たちは、設計理論の中にそのような具体性を入れていく必要があると思います。理念的、観念的なことに走りすぎてはいけない。

建築家や施工者だけではなく市民にも応えられるような、建物を見た人が、これを使いたいと思うような建築の議論が育ってくれば、その中から少しずつ良いものが出てくると思います。そのような問題意識を持っている人たちも近頃少しずつ増えてきて、その方法を構築していこうとする段階になってきたような気もします。

――― 建築の企画、設計、施工の様々な手順を進めていく際に、発注者、設計者、施工者以外にも新たな関係者が登場するようになってきました。そういう中で、対象物によっての最適な組み合わせも考える必要が出てきました。

香山　正にそこがこれからの問題だと思うのです。大学の中での教育研究でもそのようなアプローチが必要になっていると思います。

――― それに関連して、大学教育のあり方についてお伺いします。いわゆる高等教育については、学術の基礎的な教育研究が極めて重要であるという意見があります。一方で、例えば建築学科は、卒業後には建築に携わる職業に就くことがある程度前提となっています。そのために、高等教育においても当該職業分野に関する基礎的教育の充実も必要ではないか、という見方もあります。医学部では、卒業後に医師になることを前提にし

た基礎的教育が行われ、国家試験に合格して医師になります。非常に高度な専門分野ではありますが、一種の職業訓練が行われているとも見えます。

大学教育として、倫理、理念、基本的な考え方を学ぶことは必要不可欠です。一方で、先ほど先生がおっしゃった方法論のようなもの、現場と直結した何らかの教育や経験のようなものをある程度身につけることも大切なのでしょうか。

香山　建築学科には、基礎的な職業訓練に相当する教育が必要だということについて、僕は100％そういう考えです。自分が、実際目にした例ですけれども、50数年前、アメリカのペンシルベニア大学に留学したときに驚いたのは、大学院ではなくて建築学部建築学科を卒業するためには医学部と同じで６年かかったこと。そして６年次に提出する卒業設計は、正に今日のお話に関連することで、平・立・断といった一般図だけでなく、矩計図、そして積算書までつけなくてはいけなかったことです。ということは、建築学科でそれだけの教育をしなければできないでしょう。積算、矩計、ディテールを全部描かせた、そんなぶ厚い設計図書にして、それで説明する。日本では、見栄えの良いパースを描いて、それでコマーシャルの説明図みたいに描けばいいという感じでしょう。当時のアメリカの卒業設計の感覚から見れば、それは素人のものであって専門家のものではない。

――――　それは驚きです。

香山　アメリカでは、卒業させて社会に出すというのが大学の責任ですから、変な学生を世に出したらその大学の名声が落ちることになります。職業的にきちっとしていない人間をなぜこの大学は卒業させたのか、と言われるわけですよ。即ち、そこの認識が違うのです。ですから、本当に専門の教育は徹底していた。ただ、今のアメリカではちょっとそれが変わってきています。そして、これからどうなるのかは分からない。つまりそれは先ほどの問題に返ってきます。即ち、建築家の受け止められ方がどうなるかということ。例えば、今は、ユニークで人目を引く建築をつくることが話題になる時代ですから。

――――　ちょっと目立つ建築などですか。

香山　そうですね。ただ日本の大学教育は、元々きちっと職業的な専門家としては出してはいなかった面もある。どのような大学を卒業しようが、卒業式の翌日からきちんと設計できるかというと、できない。ではどうしていたかというと、実際に社会に出てから教育していたわけですね。

――――　逆に、学生時代は夢のある設計か何かをやって……。

香山　そう、夢があればいい。というより、ただ夢だけ、あればいい。そこが昔のアメリカは違ったんですよ。ただ、今、アメリカも非常にコンセプチュアルで見栄えの良い絵をしっかりと描けば世界的に有名になるという感じが出てきている面もある。全部が全部そうということではないですよ。しかし、この辺りは、今日の社会全体の大きな問題ですね。

ただ、僕は、率直に言って、今のままでやっていったら、建築学科に来る人間自体がいなくなるかもしれないという危機感もあります。問題の根本は基礎教育をきちっとやらないで専門の学校と言えるのかということ。僕が大学で教えていたときに病院の課題を出したことがあって、ちょうどその時医学部長をしていたのが親友だったから、講評会に出てもらった。彼が「この病院を設計したのは何年生ですか」と言うから、「３年の後期の課題だ」と答えた。「これは勉強し始めて何年？」、「１年」、「えっ、１年で設計しているんですか。いやそれは、私たちには考えられない。我々は、学生の時に全部基礎の学科を勉強させて、それから実地をインターンで経験させて、それで初めて手術をさせる。建築というのは荒っぽいことをするのですね」と。基礎教育を当然だと考える人から見れば、そうでしょうね。

19世紀からフランスで始まった建築教育、それがアメリカにも入ってきました。その代表格が、僕の学んだ大学だったわけですが、基本から順々

にやって、学年が終わる毎に落第させ、落第させ、落第させて入学したときの２割ぐらいしか卒業しないのです。僕がアメリカへ行った60年前は、まだそのやり方が残っていた時でした。確かに職業教育としては、誠に医学部に似ていたわけです。

建築学科の教育に、もっとメリハリの利いた選択肢があってもよいのかもしれません。デザインに特化した学校と、基礎的技術を教える学校とに分かれていて、学生が選択する。それぞれ特徴の違う卒業生が出てそれぞれの分野で活躍する。

――― 我々が学生だった昭和50年代は、本当の建築設計をやりたい人は、給料は別として、建築家に弟子入りするような覚悟で行け、と言われていた記憶があります。

香山　実際、そこで手弁当で働きながら、勉強していたのですよね。徒弟教育と同じ。中世までさかのぼれば、みんなそういう形だったわけですよ。日本の大工でも、ヨーロッパの石工でも、みんなまず徒弟になる。建築教育もそこまで戻るという考えもあるかもしれない。大学は、職能というか、根本のところがいろんな点で問われている。大学なら大学、就職なら就職のときに、何を自らの特色としていくのか。それが問われているだろうと思います。日本は全体が曖昧な社会だと言っていいのかもしれない。

地域で求められる建築家像

――― 先ほど（前号参照）市民参加のお話がありました。その市民の要望を建物として実現させるためには、それぞれの地域での建築家の役割が大きくなる気がするのですが、どのような印象をお持ちでしょうか。

香山　市民参加にはいい面がたくさんありますが、まず何よりも、人々が建築に求めているものは何なのか、そのことが直接分かります。地方に行くと、住民の方々にまずこう言われることが多い。「僕たちの欲しいのは単純なことで、住みやすい町、長く住める町をつくってほしいことです」と。ただしそれに続けて、「建築家なんか僕たちは本当は全然信用していないんです」と大抵言われます。「長く愛着の持てる建築をやっていただけませんか」と。言葉は様々ですが、言っている気持ちは大体そういうことです。「僕たちは、ここに住み着いて、子どもを育てて、そして楽しく暮らせる町をつくりたいのです」と。有名になって新聞やテレビに出たからといっても、その後、満足に使えなくなる建物なんかはいっぱいあるわけです。「隣の町のあれ、あれはごめんです」と、こうなります。それは単なる非難ではなくて、健全な建築、何年もずっと続く建築をつくってほしいという切なる願いがそこにある。だって、そうやってみんな生きているわけですからね。そう求めている声もいっぱいあるのです。僕はむしろ、そこに希望があると思うのです。プロフェッショナルとして僕たちは、その思いをちゃんとつかまえて応えているのだろうかと自問しま

す。そうでなければ専門家としては恥ずかしいのではないか。

――― そういう建築家たちを盛り上げるような方法論を関係者として考えていくことが必要ですね。

香山　したがって、最初の問題に戻りますが、公共建築の一番の役割は、そのような失われた信頼を取り戻すということではないでしょうか。建築が公共的なものだ、みんなのものだという信頼が、失われるような社会にしてはいけないと思うんですよね。

――― 東日本大震災の後、建築家の出番はあまり多くはなかったと、聞いたことがあるのですが。

香山　震災後、様々な被災地で「僕たちは、もう建築家の建物は要らないんです」と言った人がたくさんいると聞いたことがあります。しかしそれは建築家がすべてそうだということではない。本当にしっかりとした建築をつくって感謝されている人もいるんですよ。

僕たちのアトリエのOBが共同で、陸前高田市の小学校に何年がかりで取り組んで、最近ようやく完成させた。本当に苦労してつくり上げた。小さな小学校でしたが、完成したときに村の人たちが喜んで喜んで……。去年の秋に完成して、生徒たちがそこで勉強を始めて、４月に大体必要なことが終わったので、「もう、しばらくは来られなくなります」と言ったときに、先生も生徒も坂道まで見送って手を振って別れを惜しんだ。皆泣き彼も泣いた。そういう仕事をしているのもいるのですよ。こういう話があると、もう少し世の中に知ってほしいと思いますね。

――― そういうところに光を当てたいですね。

香山　ええ。世の中の見えていないところ、そういうところでいろんな声がある、そういうものを求めている人もたくさんいる。そのような声を拾うことが公共の役割ではないか。これは津波で壊された、あの一本松のあった町の話です。

――― すごく被害が大きくて、ほとんど崩壊しましたね。

香山　被害のところも悲惨だけれども、それを移転するためにまず削って造成した山の姿。これも悲惨で見ただけで胸が痛みますね。そんなところに住めと言われたって、最初は何もない砂漠みたいにパーッと平らなところでしょう。散歩する気にもなれないと言われていたそうです。しかしそこに安いコストでいい小学校をつくった。それがきっかけとなって、みんなそこを散歩するのが好きになってきたそうです。少しずつそうなってきているんですね。これは建築の力ですね。

さっき僕はネガティブな面からの発言もしましたが、一方で、一生懸命そういう努力をしている建築家もいる。地域の中でもそういうものを求めている人がいる。それは大きな希望だと思っています。

――― そのような方々に頑張ってもらえるような環境整備というか、雰囲気づくりを、建築の周辺にいる我々関係者も微力ながら努力していかなければと思います。

香山　そのとおりです。建築は、人間が正に原始時代からつくってきた一番の基本的な技術でしょう。これは人間が人間として一緒に暮らしている限り、永遠に続けなければならない仕事です。僕が自分の人生を振り返って考えてみても、昔あった技術で今はなくなったものはいっぱいあるわけです。例えば、蒸気機関車なんて昔ワクワクして見たけれども、今はもう走っていない。その技術もなくなったわけでしょう。あったとしても観光で走らせているだけです、そんなところです。コンピュータだって、やがていつかなくなるかもわからない。しかし、建築は人間がいる限りなくならない。

――― 昔の著名な建築家が設計した建物など歴史的な建築物を改修して保存・活用する事例が非常に多くなってきました。先生もそのような取組みを横浜税関本館や京都会館で実践されました。既存建物を保存しながら新しい機能を追加するのは、非常に難易度の高い設計ですね。

香山　それは先ほどのお話に繋がりますが、公共建築は本来長く生きていかねばならない建物なのです。修理も含めて、部分的に壊したり、つけ足したりされながら使われていくわけです。桂離宮だけでない、みんなそうです。それが今生きている、ということです。そういう生きて継続する力を本来求められているのが公共建築だと思うのです。

この前、古い日本の本を読んでいると、公（おおやけ）というのは、日本の古い言葉で大家（おおや）が語源となった言葉であることを知りました。公は大きい家ということなんだ。例えば、縄文時代にできた三内丸山遺跡の建物を見てみると、みんなそれぞれが小さな小屋に住んでいた。しかしその集落の中心に大きい家があります。それが公なんです。ああ、分かりやすいなと思いましたね。公共建築の始まりですね。

――　大きい家にみんなが集まる。

香山　みんなが集まる部屋が公なんだから、そういうことに思いが至ると、公共建築というのは人間社会の根本だと気づくね。人間は一人だけでは住めない。そういう昔からある基本的な力が求められているわけで、永遠にそのことは消えることはない。ですから、そういう力をちゃんと捉えるならば、「公共建築は不滅だ」ということになる。

木材などの活用

――　次の話題に移らせていただきます。先生は木造建築にも多数取り組まれていると伺っています。日頃の設計活動を通じて、それらのコスト管理の工夫や問題意識などについて、お聞かせください。

香山　建築コスト管理システム研究所が、コストに関する基本情報を収集・公表されているのは、僕たちが様々な仕事をするときの基本なので、本当にありがたいと常々思っています。

その上で、今日様々な設計を進めながら考えていくと、従来の単価を拾うだけではできないものに直面するんです。たくさんの例がありますが、例えば今、京丹波という町の庁舎を、その町の木だけでつくろうと思って取り組んでいるんですが、木造だけでやると工事費が高くなるからやめろとか、様々な話がいっぱい出る。確かに積算したら、２階建ての建物ぐらいだったら鉄骨か鉄筋コンクリートでつくった方が、どう積算したって安くなるのです。しかし、なんとか、木でつくりたい。なぜなら元々京丹波というのは、京都の都をつくるときの木を出してきた、日本の歴史を支えてきた木の生産地です。それが今、死んでいる

状態にあるのは、情けない。それで、木材を上手に活用する工夫をして、何とか鉄筋コンクリートと同じ値段というところまで持って来ました。

木材の使用を難しくしている理由の一つは、木材の値段は、実際の生産地の山で切ったときの値段に加えて、運搬賃や加工賃などの様々な費用が加えられて決まることです。標準のJAS規格品の使用を求められる場合もあります。また集成材を使うことになると、単純なものをつくる工場でも地方のすべての町にあるわけではありません。遠方の工場での製作が必要になり、往復の運賃でも値段が高くなるわけです。

それで、京丹波で一番工夫したのは、現地で切った木を使ってつくること。しかも、出来るだけ材料に加工はしない。そこでとれる木材には細いのも太いのもありますから、基本設計段階からよく考えておいて、それぞれを使いこなすというふうにすればいい。これを口で言うのは簡単なんだけどね……。

また木を切るには順序があります。京丹波の庁舎はそんなに大きいものではありませんから、そこの町だけでも、必要な量の木はとれるのです。しかし、もし必要なだけ切ってしまうと、そこの木はまた60年ぐらい生産できない。建築家だから自分の建物だけができればいいと考えるのではなく、木材の生産の専門家、森林資源を研究している人、地元の人たちとチームを組んで、切る順序まできちっと考えて、森林の生産性が保たれるように、それをどう使うかというのを基本設計の段階でやらなくてはいけないのです。これは流通材をただ買って使うこととは違うわけで、挑戦的で面白いのですが、僕たち建築家だけの知識ではできない、様々な専門家との協同が要るのです。

それを積算の話となると、木材についてはどの段階でどうやって積算をするのか。最終的には設計をして、それで工事の入札にかけますが、一方で、木材の手当てはその前に全部しておかなければなりません。非常に難しい。

――― 現実的にはその段取りが必要ですね。

香山　しかし、それは標準的な積算ではできないでしょう。

――― おっしゃるとおりです。そこについて、何か方法論を編み出さないと、木造建築が広がらないのです。

香山　僕たちはレンガも長持ちし、断熱性能も優れているので出来るだけ使おうと思っているんだけど、レンガもそれに似た課題があります。地域のものでつくるのが一番安いのですが、今、地域でレンガをつくっているところはほとんどなくなっています。

――― 木材など地域材の活用については、発注者サイドとしても様々に検討する事柄が多く、今後の大きな課題の一つだろうと感じます。

企画・設計段階の新たな方式の模索

――― 最後に、今日のお話を総括してお伺いできればと思います。いい建築を設計するためには、品質、コスト、工期などの様々な要素をバランスよく調和させていく必要があります。一方で、求められるものは大きく変化していますし、新しい考え方の導入の検討も必要になっていると思います。先生のお考えをお聞かせください。

香山　直面する基本的な大きな問題は、建築の様々な機能が集約化あるいは複合化されるようになってきたということだと思います。大昔は、様々な公共的な機能は大きな建物の中で一括りに集約されていた。しかし、社会の発展とともに、その機能がだんだん専門分化されてきました。例えば教会の中から病院が分離独立して建てられた。学校も別に建てられるようになった。近代社会とは、求められるそれぞれの機能を高度化するために一つひとつを分化し特化していく道だったと言っていいと思います。

しかし、その結果、社会の総合性が希薄になってきた、したがって、それをもう一度全体に戻そう、少しずつ戻したいという動きが起こってきている。さっき言った市民運動で、図書館を市役所

と一緒にしてくれと。今、京丹波でも庁舎の中に図書館を入れようとしています。そのようなニーズはとても多い。山形でもそのような試みを進めようとしています。

――― 我が国は人口が減ってきています。必然的に、様々なもののダウンサイジングが求められます。公共建築も同じ状況にありますから、既存建物も含めた有効活用が重要になります。財政的な余力にも限りがありますから、そのような方向性に向かわざるを得ないのでしょうね。

香山 それに対応するためには、設計の初期段階で、あるいは企画の段階からそれを考える。しかし、そこで全部答えを出せないので、設計をしながら、あるいは場合によっては設計が終わって工事が終わってから、使いながら考えるということも出てくるのです。それにどういうふうに対応するのか、従来のままでは答えが出てこない。そのような問題だと僕は思っていますね。

――― それに応じた新しい方法論を考えていかないといけないですね。当研究所は、企画段階・設計段階での様々な方法論についても今後力を入れたいと考えております。今後ともご指導をよろしくお願いします。

香山 それには、例えば国全体に通じる大きなシステムという形で考えるというアプローチもありますが、僕たちみたいに個々の建築で悪戦苦闘している人間は、個別の問題を解決することをいくつか積み重ねることで、少しずつ全体に繋がる共通なものが見えてくる。そのようなアプローチも同時に必要だと思っています。見えそうな気もするんだけど、現実にはまだなかなか見えませんが……。

――― 個別解をいろいろ見せていただいて、それらが集まってくると一般解化できるようになる可能性はありますね。

香山 個別が積み重なって一つの全体の方式が出てくる、あるいは全体から個別をとらえ直す、その相互往復が求められる。

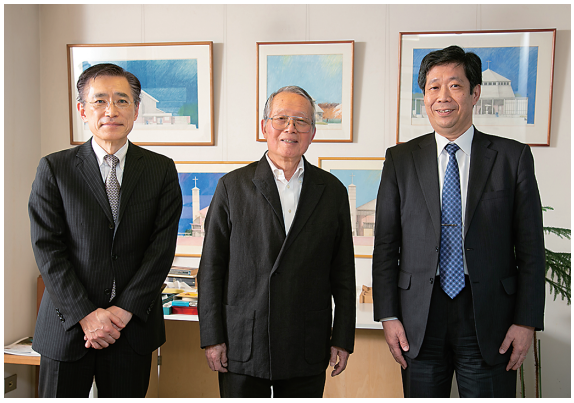
――― 逆に一般解から入ると理念的になってしまい、それこそ機能しないものがつくられる可能性があります。頭の中だけで考えるのではなく、現場から出た成果を一つひとついただきながら、考えを進めていくことがよいかもしれないですね。

香山 それは建築という技術の持っている昔からの基本的な性質で、一般解から入ると、一つ二つのものにはいいけれども、10も20ものものにはとてもうまくいかない。そういうことが多いでしょう。

――― そういう上手くいった事例に脚光を浴びせて、多くの方に見てもらえるようにすることが大切ですね。様々な建築賞がありますが、それぞれにそのような役割が期待されているのだと思います。一つひとつを関係者の方々に見ていただいて、それが積み重なって一定の成果に結びついていけばよいですね。

香山 僕もいくつかの賞の審査にも参加させていただいたし、受賞経験もあります。様々な建築賞は、具体的なことを実例で見せてくださる貴重な機会だと思います。僕も、これからも町の建築家の一人として頑張っていきたいと思っています。

――― 長時間にわたりまして多くの貴重なお話をお伺いしました。本当にありがとうございました。結びに、先生のますますのご活躍を心よりお祈りいたします。



聞き手／
本誌編集企画委員長　羽山 眞一
（（一社）公共建築協会　常務理事）
本誌発行人　川元　茂
（（一財）建築コスト管理システム研究所　専務理事）